

# 日吉台地下壕保存の会会報

第76号

日吉台地下壕保存の会

「港北区ふるさとサポート事業」

## 日吉の戦争遺跡ガイド養成講座

ふるってご参加下さい。

日吉台地下壕保存の会は、「港北区ふるさとサポート事業」に応募、助成金を受けて、今年度新たに二つの事業に取り組んでいます。会員の皆さまの積極的なご参加をお待ちしております。

①ガイド体験講座（今年度5回で次年度につなげる。）

②日吉の戦争遺跡のやさしい「ガイドブック」の作成

### 日吉の戦争遺跡ガイド体験講座

～戦争遺跡を歩いて平和の語り部となろう～

第1回 10月22日(土) 講演「戦後60年、アジア太平洋戦争をどう考えるか」  
慶応義塾大学日吉キャンパス 来往舎 13:30～16:00

第2回 11月19日(土) 学習「日吉の戦争遺跡」  
①連合艦隊地下壕をはじめとする海軍施設  
②日吉の空襲と学童疎開  
③大聖院と小嶋萬助  
慶応義塾大学日吉キャンパス 来往舎 13:30～16:00

第3回 12月10日(土) 「日吉の戦争遺跡を歩く」(その1)  
連合艦隊日吉台地下壕  
慶応義塾大学日吉キャンパス 来往舎 13:30～16:00

第4回 2006年1月14日(土) 「日吉の戦争遺跡を歩く」(その2)  
箕輪方面 日吉駅集合 13:30～16:00

第5回 2月18日(土) 「日吉の戦争遺跡を通して私達が子どもたち・  
市民に伝えたいもの」  
慶応義塾大学日吉キャンパス 来往舎 13:30～16:00

対象 市民・学生(高校生以上) 参加費 1500円(1回300円)

申込方法 はがきまたはFAXで住所、氏名、連絡先(Tel・Fax)をご記入の上  
喜田(港北区下田町2-1-33:TEL045-562-0443)までご連絡下さい。  
〆切 10月15日(土) 先着30名

日吉の戦争遺跡ガイドブックも、本年度中には発行予定です。

# 日吉台地下壕保存の会 「神奈川地域社会事業賞」を受賞

運営委員会

このたび、神奈川新聞社と神奈川新聞厚生文化事業団が主催する、第18回神奈川地域社会事業賞を日吉台地下壕保存の会が他の4団体（「伊勢原市たんぼぼの会」「鎌倉を美しくする会」「かわさき自然調査団」）とともに受賞することになりました。

神奈川地域社会事業賞は、福祉・国際交流・教育・文化・環境・町おこし・地域振興などの各方面で長年地域に貢献している市民レベルの活動団体を対象に選考され顕彰されたものです。今回39団体の応募があったそうですが、日吉台地下壕保存の会が顕彰されたことは、会員の皆さまをはじめ地域の戦跡保存団体や全国戦争遺跡保存ネットワークなど戦争遺跡の保存運動を通して平和を願う諸団体の支えがあって、そのうえで私たちの地道な活動が社会的に評価されたものと、ありがたく受け止めております。これまで本会にお力添えを下さった皆さま方のおかげと、ここに心から感謝しお礼申し上げます。

私たちは、これからも戦争遺跡の調査・研究・保存運動、そして小学校をはじめ広く一般市民への見学会を通して社会に貢献していきたいと思っておりますので、引き続きご支援下さいますようお願い申し上げます。

## 神奈川地域社会事業賞

# 5団体貢献たたえ

10月表彰式

第十八回神奈川地域社会事業賞（主催・神奈川新聞社、神奈川新聞厚生文化事業団）の選考委員が二十二日、横浜市中区の神奈川新聞社で開かれ、「伊勢原市たんぼぼの会」など五団体の受賞が決まった。表彰式は十月二十二日、横浜市内西區みなとみらいのパシフィックホテル横浜で行われる。

受賞団体の横顔22面に

神奈川地域社会事業賞は福祉、環境、町づくり、文化、国際交流、教育などを見を総合して行われ、次の分野で、自主的な取り組みを通して長年地域に貢献している市民レベルの活動を顕彰するのが狙い。一九八八年にスタートした。

今回は、五月十七日から七月八日までの募集期間中に三十九団体の応募があった。

選考は社外委員五人を含む八人の選考委員（委員長・稲村隆二神奈川新聞社長）で最終選考を行った。それぞれの推薦内容に本社記者の調査も加味し、各選考委員の意見を総合して行われ、次の五団体の受賞が決まった（五十音順、かつこ内は代表者）。

▽伊勢原市たんぼぼの会（内藤勝）▽鎌倉を美しくする会（平田胤幸）▽かわさき自然調査団（三島次郎）▽相模原市16区映画研究会（藤井市四郎）▽日吉台地下壕（こ）保存会（大西章）

選考委員は次の通り（五十音順）。

▽石川菊二 県立かながわ女性センター館長▽稲村隆二 神奈川新聞社長▽大江浩二 横浜YMCA国際・地域事業部長▽大谷義輝 神奈川新聞厚生文化事業団専務理事▽加藤藤二 神奈川新聞編集局長▽島津直美 かながわ県民活動サポーターセンター所長▽野並直文 横浜市長▽藤井紀代子 横浜市男女共同参画推進協会理事長

神奈川地域社会事業賞の応募にあたりましては、本会が参考資料を添えて自薦応募しましたので、活動内容を記した「応募用紙」を併せて下記ご報告いたします。

## 第18回神奈川地域社会事業賞



## 応募用紙

\* 添付書類＝年間の予算書・決算書

\* 参考書類＝会報やチラシ、報告書、新聞記事など、団体、グループの活動が分かりやすく伝わる資料がある場合は添付してください。また、他賞の受賞歴がある場合は、ご記入ください。

団体（グループ）名		日吉台地下壕保存の会	
ジャンル（○で囲んでください） <input checked="" type="checkbox"/> 文化・福祉・国際交流・自然保護・ <input checked="" type="checkbox"/> 教育・環境・町おこし・その他（ ）			
設立年月日	1989（平成元）年4月8日	活動年数	16年
代表者名	大西章	会員数	197名
代表者個人の住所 〒154-0022 東京都世田谷区梅ヶ丘1-60-19			
代表者個人のTEL		代表者個人のFAX	
03-3427-2519		03-3427-2519	
<p>活動内容（この欄に要約して必ず記入してください。資料がある場合は別に添付してください。）</p> <p>主として慶応義塾日吉キャンパスに現存する戦争遺跡（連合艦隊司令部地下壕）など、横浜市港北区に存在する戦争遺跡の調査・研究・保存活動をすすめるとともに、小中高大学生をはじめ広く市民への地下壕見学会を行っています。最近では、総合学習・調べ学習の年間カリキュラムに位置づけて授業を展開されている学校も見られようになりました。私たちは、この活動が、市民や地域の学校において歴史・平和・社会教育に生かされ、少しでも社会に貢献できますよう努力をいたしていきたい所存です。</p> <p>私たちの調査研究活動は、文献資料・考古学的手法・聞き取り調査など多岐にわたっていますが、毎年、「陸軍登戸研究所」「蟹ヶ谷通信隊地下壕」「日吉台地下壕」の研究保存活動しているそれぞれの団体が、共同して横浜・川崎「平和のための戦争展」を開催し、戦争遺跡の実態や研究成果を発表するとともに、見学会や保存活動に生かされています。</p> <p>2002年から2004年の3年間は慶応大学学術フロンティア（学内研究組織）「超表象デジタル研究センター」一人間と空間—とも共催しています。また昨年、千葉県館山市で行われた戦争遺跡保存全国ネットワーク（加盟団体35団体・個人会員153名）が主催する、全国シンポジウムには二つの分科会で活動の報告をいたしました。</p> <p>今年は、13回目の「平和のための戦争展」を川崎市平和館で7月16日・17日の2日間開催しますが、日本がアジア太平洋戦争に敗れて60年という節目の年にあたり、テーマを「昭和20年“戦争の記憶”をひきつぐ」として一層充実した催しにしたいと思っています。一方、来年3月までに小学校高学年から中学生向けの分かりやすい「戦争遺跡ガイドブック」を作成する予定です。</p> <p>（具体的活動内容につきましては、別紙添付資料をご参照下さい）</p>			

\* 推薦の場合は、下の欄に推薦者名をお書きください。

推薦者名	推薦者の所属団体名
推薦者個人の住所 〒	
推薦者個人のTEL	推薦者個人のFAX



## 第13回横浜・川崎平和のための戦争展

### 「昭和20年“戦争の記憶”をひきつぐ」

敗戦から60年、節目の年に「第13回横浜・川崎平和のための戦争展」が、7月16日(土)17日(日)川崎市平和館で開催され、述べ250人の参加者がありました。

今年の戦争展の特長として

- ① 戦後60年 アジアの視点で学ぶ(シンポジウムと講演会) 7月17日(日)  
日本に留学している韓国・中国の学生さんからご自身が受けてきた教育の話を聞かせて貰い、また、の講演「アジアと歴史対話の意義と課題」から日・中・韓三国の民間研究者の間で共通の教科書づくりが進んでいるその実践報告を中心に学んだ。
- ② 朗読と語り 大原穰子氏「日本国憲法前文・第九条」(朗読)  
松尾敦子氏「帰ってきた息子」「まちゃんと」(語り)  
須田倫太郎氏「火山灰地」より冒頭部分(朗読)
- ③ 戦争の記憶を絵に残す  
多くの市民の協力で戦争体験の絵画が展示された。(33作品)
- ④ 実物資料に接する。陸軍登戸研究所の「状況報告書」「偽札」などの未公開資料を含む実物資料の展示
- ⑤ 神奈川県戦争遺跡を整理して写真展示したこと

他にも当日はNHKはじめマス・メディアでも紹介され、8月15日のNHKのニュースでも登戸研究所の偽札印刷を行った直接の担当者(大阪在住)とのインタビューが報道された。

今年は実行委員を多くの市民に呼びかけ、「戦争展」に参加して貰ったり、また横須賀「貝山地下壕保存の会準備会」からも写真「空襲紙芝居」の作品が寄せられ、今まで以上の取り組みと広がりを見ることができた。



戦後60年 アジアの視点で学ぶ  
(シンポジウムと講演会)



戦争の記憶を絵に残す

## ○ 報告

運営委員 亀岡敦子

戦後60年の節目の今年は、新聞もテレビも特集をくんで「あの戦争」をつたえようとしています。また戦争に関する出版物はおびただしい数にのぼり、映画やアニメーションの制作上映もさかんです。また市民による様々な催しもの多く、なかでも特筆すべきは、これまで口を閉ざしていた戦争体験者が、自らの方法で、戦争を語り、2度と戦争をすることのないようにというメッセージを伝え始めたことです。

これらは戦争の記憶の風化をふせぐ意味において、おおいに歓迎すべきことでしょう。しかし、すべて両刃の剣のあやうさを持っているように思えます。関わりをもつひとりひとりの知識の質量と、考え方によっては、正反対のメッセージを発信することになりかねないからです。

今年で13回目をむかえた川崎・横浜平和のための戦争展は、最初から、「私の街から戦争が見える」という大きなテーマを根底に置いてきました。私たちが当たりまえのように住んでいる地域にのこる戦争遺跡から、戦争の愚かしさと悲惨さを知ってもらい、平和の尊さを考えるきっかけにして欲しいとの願いからです。言い換えると、日本中ある意味で戦場だった、ということになります。

「横浜・川崎平和のための戦争展」10, 11, 12回は、慶應義塾大学日吉キャンパスの来往舎を会場に、「日吉学術フロンティア～空間と人間～」との共催で行われました。「日吉キャンパスにみる戦時下の青春」が、3回の共通テーマでした。楽しげな笑顔の現代の学生が行き交う同じ場所に、ゲートルを巻き、銃を肩にした60年前の学生が写っているのです。あまりに残酷な二重写真です。しかし、これら、戦時下に青春をおくらざるをえなかった、そしてそのなかの何人かは、二度と学園に戻ることができなかった、そんな青年たちの写真には、私たちに強く訴えるものがあります。戦争は歴史の教科書の中

にあるのではなく、連続する日常の中の現実であることを、実感させられるのです。

13回目の今年は、7月16, 17日の二日間、川崎市平和館で開催しました。テーマを「昭和20年 戦争の記憶をひきつぐ」と決めました。「記憶」というような抽象的でしかも私的で形の無いものをひきつぐとは、どういうことなのか、果たして可能なのでしょうか。しかし、戦後60年たったいま、物言わぬ戦争遺跡の中にある、「戦争の記憶」



朗読と語り



を語らせなくては、日吉台や蟹ヶ谷の地下壕は、ただのトンネルのようなものにすぎないし、登戸研究所の跡をとどめる木造建物は、近代的なキャンパスにある不釣り合いな古い廃屋にすぎません。まず、そこであった事実と、そこに関わった人の行動とを思いと、そこが戦史のうえでどんな役割をはたしたのかを、正確に知り、つぎに、それを具体的に解りやすく伝えなければならないと思います。

今回新たな展示にくわえたものに、連合艦隊司令部が送受した沖縄戦などに関する電報のコピーや、登戸研究所で印刷された中国紙幣の偽札などの実物資料があります。

また神奈川県全域の戦争遺跡について地図や写真を展示し、私たちの住むこの県が、いかに戦争と深くかかわっていたかをしめました。新井揆博氏作成の「神奈川県の戦争遺跡リスト一覧」には、79箇所の戦争遺跡がのせられています。

「個人の記憶をひきつぐ」ための、今年はじめの試みとして戦争の体験を絵に残してもらい、「市民が描いた“戦争の記憶”」として展示しました。呼びかけに応じて10人以上の方が、空襲や疎開の絵をよせてくれました。何十年も絵を掻いたことがない、という人もいたのですが、どの絵にも人の心を動かす何かがありました。体験を聞き、体験を読み、体験を見ることによって、人から人へ伝えてゆくことができるのではないか。そんな確信を持ちました。

16日午後、大原穰子さんと松尾敦子さんの二人の女優さんによる、朗読と語りを聴きました。ひとの生活そのものである方言でかたられる憲法の条文や民話は、しみじみと胸にしみわたり、大声でさけぶより力強く平和を訴えかけたのです。

17日は、アジアの隣人たちと過去を共有し、未来に引き継ぐということを、考えた一日でした。午前中は、シンポジウム「アジアにおける戦争体験の継承」があり、大学院で学ぶ中国と韓国からの3人の留学生と、日本からも2人の大学院生がくわり、率直な意見がかわされました。



講演 大日向純夫氏（早大教授）



東アジア近現代史

『未来をひらく歴史』(高文研)

のか、じっくりと考えさせてくれた「平和展」でした。くじけないで、無理しないで、続けることこそなにより大事。

午後は、大日向純夫早稲田大学教授の講演「アジアとの歴史対話の意義と課題」がありました。氏は日中韓の歴史学者が共同編集し、今年5月、同時出版された日本側の責任者です。出版までの困難さは、控えめな話からも推察できましたし、その内容からも、歩み寄ることの多難さを認識しました。しかし今、さまざまな分野で交流が始まっていることを思えば、隣人たちとの付き合いは確実に新しい段階に踏みだしていることは、間違いありません。

私たちの会のこれからをどうすれば良い

## 第9回戦争遺跡保存全国シンポジウム 長崎大会成功裡に開催・終了

被爆、敗戦60年の節目の年、第9回戦争遺跡保存全国シンポジウム長崎大会は8月20日(土)～22日(月)まで3日間に渡り、被爆地長崎市内で述べ250名が参加し、開催されました。日吉台地下壕保存の会からは6名、神奈川県内からは11名が参加し、被爆の戦跡を巡り、シンポジウム、分科会に参加、また懇親会などで全国の保存団体と交流、情報を交換しました。

【フィールド・ワーク】大会に先立って、20日(土)午前中フィールドワーク「被爆遺構巡り」が三つのコースに分かれて行われ、百人近い参加者がありました。真夏のうだるような暑さの中、現地の「退職教職員の会」の方々はじめ熱心に「爆心地公園」などを案内してくださり、60年前の被爆の悲惨さを間近に知ることができました。また第三日目の22日(月)には

①資料館巡りコース

②ピース・クルーズ端島(炭坑跡)見学 と二つのコースに分かれて見学会が行われました。

### 【大会】

《第一日目》午後からの大会は長崎市、長崎港を一望に見る山頂の老舗旅館「矢太楼・南館」で行われ、長崎大学の中国、韓国人留学生によるソプラノ、テノール独唱で幕を開けました。

『基調報告』主催者、地元代表、来賓挨拶の後、「全国戦争遺跡保存ネットワーク9年の取り組みと到達点」と題して戦跡保存全国ネット代表村上有慶氏より基調報告がありました。村上氏は戦後の戦跡保存の動向と9回にわたる全国シンポジウムの足跡とを振り返り、「2005年6月現在、指定文化財、登録文化財となった戦争遺跡は国指定文化財(広島原爆ドームなど7件)、国指定登録有形文化財35件はじめ計104件になる。1990年沖縄県南風原陸軍病院壕の先駆的な文化財指定以降、14年余の短期間での、行政、学会、市民運動の高まりの成果として、この件数は高く評価できる。しかし中には横須賀の旧海軍航空技術廠本庁舎のように指定を受ける前に取り壊されてしまった戦争遺跡もある。」「目から消えるものは記憶からも消える。」「負の遺産をどう残すのか」「どう次世代へ平和を伝えていくのか」と問いかけ、「戦跡保存運動の取り組みがさらに必要である。」と報告されました。

この報告を聞いて日吉台地下壕群と旧海軍連合艦隊司令部の建物は国による調査が行われ、報告が待たれている段階ですが、全国の状況を見ても、その歴史的重要性から見ても当然早期の文化財指定、保存が行われなければならないという思いを新たにしました。

『特別報告』その後地元より特別報告として地元実行委員会 高実康稔氏「長崎における韓国・朝鮮人強制連行と被爆」在外被爆者支援連絡会 月川秀文氏「在外被爆者裁判の経過と今後の課題」がありました。戦後60年、戦争の被害と加害、両側面から運動を進められている、まさに地元でないと分からない戦争の実相が伝えられました。

『分科会』第一分科会「戦争遺跡保存運動の現状と課題」報告数 7

第二分科会「調査方法と保存整備の研究」報告数 5

第三分科会「平和博物館と次世代への継承」報告数 5

分科会は20日(土)21日(月)両日に渡って「矢太楼」内各会場で行われました。

日吉台地下壕保存の会は、第一分科会に3名が参加し、発表を行いました。(詳細:後述)

### 《第二日目》

『記念講演』午前中の分科会に引き続き、午後から、全体集会・記念講演 前長崎市長

本島等氏「信教の自由は長崎からー浦上四番崩れー」  
「原爆投下は正しかったかー戦争責任を考えずに核廃絶は語れないー」が行われました。「浦上崩れ」とは江戸時代長崎の浦上で4回に渡って行われたキリシタン弾圧のことですが、開国後明治新政府も列強からの抗議で、信教の自由を認めざるを得なくなった、信教の自由は長崎から始まったことから説き起こし、長崎の原爆投下で、浦上に住んでいたキリスト教徒も、朝鮮の人々も亡くなった。日本が行った戦争の加害責任を考えずに核廃絶は語れないという本島氏の持論を訥々と展開されました。著名な元市長の講演にホール一杯に集まった聴衆は暑さも忘れて聞き入っていました。



記念講演  
本島等現地実行委員会代表（前市長）

※本島氏の「原爆投下は正しかったか 戦争への加害責任を考えずに核廃絶は語れない」の冊子は、本会運営委員会で保管しています。ご覧になりたい方は本会運営委員までお問い合わせください。

講演後分科会報告、大会アピールが採択され、大会は幕を閉じました。

『ネットワーク総会』活動報告、財政、活動方針などが話し合われました。全国ネット設立団体である保存の会は次年度も引き続きネットワークを支える取り組みが必要です。

次回第10回大会は、2006年8月群馬県伊香保温泉で行われることが決められました。

## ○ 第一分科会報告要旨

神奈川県戦争遺跡

### ー横浜・川崎の戦争遺跡の現状と保存運動の課題ー

運営委員 新井 揆博

今年が戦後60年の節目の年ということもあって、私たちは、ここ数年の活動を整理して戦跡保存全国シンポジウム長崎大会に報告し、各地の研究や運動から学んできました。以下、第一分科会「戦争遺跡保存運動の現状と課題」（8月21日）に報告した要旨を下記に紹介します。

#### 1 文化庁が進めている神奈川県の戦争遺跡の詳細調査

全国の指定文化財・登録文化財に指定された戦争遺跡は104件（05年8月現在）。神奈川県が文化庁に報告した戦争遺跡所在調査報告は33件（02年7月1日）。文化庁は、このうち12件を詳細調査の対象として調査に入ったが結果報告は遅れている。

#### 2 神奈川県の戦争遺跡の特長

戦争遺跡は全国的に見ても県レベルで見ても文化庁がいつているより遥かに多い。質的にも多岐にわたっている。特に神奈川県は、首都東京に隣接していつこともあって明治以来軍事上の枢要地帯が形成された。横須賀は世界屈指の軍港で今も多くの戦争遺跡が残る。昭和10年代、相模原は陸軍士官学校を始めとする軍都となった。アジア太平洋戦争末期には、連合艦隊司令部は海から陸に上がり地下に潜った。神奈川では早くから軍需を賄う京浜工業地帯が形成された。だから、川崎・横浜大空襲など大きな被害を蒙った。小田原空襲は45年8月15日未明のことだった。このように神奈川には加害や被害の側面を持った沢山の戦争遺跡が残っている。

#### 3 戦争遺跡の消滅危機と保存への道

一方、全国に数万をこえる戦争遺跡の多くは、開発に伴う破壊や、何ら保存対策がほ



どこされないまま、風化・改変・消滅の危機に直面している。このことは神奈川県においても同様で、①艦政本部地下壕の場合 ②航空本部地下壕の場合 ③蟹ヶ谷地下壕の場合を例にして問題提起した。戦跡保存に消極的な行政に対して、戦跡保存全国ネットの協力を得て、広く世論に訴え行動することの大切さを報告した。

#### 4 地域に根ざし再び戦争を起こさないもう一つの平和発信

1) 第13回 川崎・横浜「平和のための戦争展」をどのような観点で取り組んだか

①戦後60年アジアの視点で学ぶ。②大原穰子「日本国憲法前文・第9条」をはじめと知る朗読と語り。③戦争体験者の協力で戦争の記憶を“絵”にして残す。④戦争の実物資料に接する(陸軍登戸研究所)。⑤写真展示を含め神奈川戦争遺跡の所在を知る。

2) 横浜市港北区支援を受けて「ふるさとサポート事業」に取り組む

①「戦跡ガイドブック」を作り小中学生自らの平和・調べ学習のサポートに生かす。

②広く市民を対象とした戦跡ガイド養成講座をして平和への語り部を増やす。

3) 蟹ヶ谷地下壕保存の会では

地下壕の補強工事も一段落し、保存の会では近く地下壕周辺の自然環境保全とあわせた地下壕の史跡指定と市民への内部公開に向けて川崎市行政への運動が展開される方向。

#### 5 私たちの戦跡保存運動の課題

今日の戦争遺跡の保存状況は、放置しておくで破壊・消滅の危機が極めて高い。今迄にも増して地域に根ざした地道で幅広い活動が求められている。

#### ○ フィールドワーク



爆心地南東 800m  
山王神社被爆「片足鳥居」に向う見学者



坂本町民 700 人が犠牲になった殉難の碑



爆心地東 600m長崎医科大学正門門柱 (7 t) が爆風で前方に 9cm 傾き隙間を飛んできた砂礫が埋めた



爆心地北東 500m浦上天主堂前庭の熱線爆風で黒焦げになった聖人の痛々しい石像



直径 5.5m50t ある鐘楼ドームも 35m  
はなれた川に吹き飛ばされた



爆心地北 300m 平和公園に残る長崎刑  
務所跡 中国朝鮮人を含め 135 人全  
員が即死



ピースクルーズ「端  
島(軍艦島)」の洋上  
見学 1974 年 4 月  
以降無人島となる



1959 年に再建され  
た浦上天主堂 浦  
上地区には 12000  
人に信徒がいたが  
8500 人が爆死した  
という



爆心地のモニュメント(1968 年  
建立) 地下数mには被爆当時の  
地層が残っている

## ○ 長崎大会に参加して

運営委員 岩崎 昭司

今回で、戦争遺跡保存全国シンポジウムへの参加は、  
神奈川・山梨・千葉・長崎と 4 回目ですが、これまでの  
3 回は聞くだけでした。

今大会では、21 日午前中 3 番目の発表になり、私は  
今回初めて日吉台地下壕保存の会・蟹ヶ谷地下壕保存の  
会両会の有志の一人として、第一分科会報告「横浜・川  
崎の戦争遺跡の現状と保存運動の課題」の中の一部、  
「第 13 回川崎・横浜平和のための戦争展に取り組んで」

の部分、約 4~5 分で発表しました。下準備もせずに、ぶっつけ本番で発表してしまいました。司会者から後何分と指示された途端に、自分が後何を話したら、何分かかるのか？急にパニックしてしまい、その後、何を話したのか記憶にありません。なんとか自分の発表が終り、後で考えてみたら、自分で思っていた以上に、自分が話したかった事を話して無い事に気がつきました。勉強不足ですね！人前で話す事の難しさを実感しました。やはり下準備は



報告 岩崎・喜田



必要である事も感じました。

今回は私にとって大変な経験をする事が出来ました事は、会員の皆様のご協力のお陰があって体験する事が出来ました。ありがとうございます。

私にとって、長崎は34年ぶりの来訪でした。その前は、4年間で6回ほど来ていますが、路面電車に乗り感じた事は、電車の走る軌道は変わっていませんが、周りの景色が変わっている事、観光長崎が前面に出ている事にびっくりしました。あまりにも変わっているのです、何もわからず浦島太郎になってしまいました。

### 図書紹介

日中韓3国共通歴史教材委員会編 日本・中国・韓国共同編集

「未来を開く歴史－東アジア3国の近現代史－」(高文研 1600円＋税)

戦争展で大日方純夫先生(早大教授)がご講演の中で、その編集の過程、難問、苦労話も含めて紹介された図書です。日本語、中国語、韓国語で、しかも戦争という重い内容を被害と加害の当事国の人々が共同編集していくという画期的な歴史書です。これまでにこのような歴史書があったのでしょうか。戦後60年、戦争の被害と加害の当事国が過去を歴史認識の中で克服することは既にドイツでは行われていることと大日方先生は話されました。1970年代からポーランドとの間で教科書協義を行ったのを始め、他の国々との間でも「過去の克服」のためにナチによる加害(戦争責任)の追求と犠牲者への補償、そして繰り返さないための教育が行われてきました。日本では戦後、一億総懺悔と東京裁判による免罪(戦犯の復権)、アメリカの占領政策などにより、また近現代史が殆ど教えられない日本の歴史教育の状況の中で、曖昧な歴史認識のまま推移してきました。(講演資料より)



戦後60年、アジアでもここによりやく“開かれた歴史認識の共有”をめざす試みが始まったのです。

この本は日・中・韓3国の研究者・教師・市民によって2002年3月「第1回歴史認識と東アジアの平和フォーラム」が中国・南京で持たれて以来“3年間、10回の国際会議を重ねて、共同編集・執筆した近現代史の入門書”(帯封より)です。言葉の違い、立場の違い(原爆投下、東京大空襲など日本の被害を日本が招いた結果だという中・韓の見方など)を乗り越え、正確な叙述・歴史的事実の検証・評価(例えば中・韓の朝貢関係をどう見るかなど)を期し、前提となる事実(例えば武士・両班・郷紳など)の相違を確認し、表現と叙述の方法(例えば南京事件の叙述)、呼称・用語(認識)の問題(例:韓国の「併合」か「強占」か等)を確かめ、正に数々の困難と苦労を克服して、ようやく刊行に至ったのがこの本です。

その間、国際会議ばかりでなくインターネットやメール、FAXなどで連絡を取り合い、情報の交換が行われました。IT時代の21世紀でなければできない書といえるでしょう。

『自国中心の歴史は21世紀には通用しない。』(帯封より)国際的な、グローバルな、人類史的な立場からの東アジア近現代史の入門書として最適だと思います。「大東亜戦争」という中・韓の人には反発を受ける用語である戦争を位置づけようとする、他国の人にはあまり見せれない“国家(国粋)主義的歴史教科書”と比較して読むのも一興かもしれません。JAPAN TIMESにも紹介され、英語版も近く刊行の予定とか、世界の国々に広がる可能性があるというのも当然と思われれます。(文責:谷藤)



## ●活動の記録 2005年7月～9月

- 7/5 地下壕見学会 日吉台小学校6年生110名  
第3回運営委員会 会報75号発送(慶応高校物理教室)
- 7/8 平和のための戦争展実行委員会(法政二高教育研究所)
- 7/9 定例見学会 37名
- 7/14 平和のための戦争展展示準備作業(日吉地区センター)
- 7/15 平和のための戦争展準備(川崎市平和館)
- 7/16～17 第13回川崎・横浜平和のための戦争展(川崎氏平和館)参加者250名
- 7/25～29 「日吉台地下壕写真展」(すとう信彦と市民政治バンド事務所)
- 7/28 第4回運営委員会(日吉地区センター)
- 8/4 「港北区ふるさとポータル事業」略称(ふるサポ)について相談会(日吉地区センター)
- 8/9 「ふるサポ」相談会(菊名ジョナサン)
- 8/14 戦争遺跡保存全国シンポジウム長崎大会の発表資料印刷(かながわ県民ポータルセンター)
- 8/20～22 第9回戦争遺跡保存全国シンポジウム長崎大会 運営委員他9名参加
- 8/31 「ふるサポ」相談会(菊名ジョナサン)
- 9/2 「ふるサポ」相談会(菊名ジョナサン)
- 9/6 第5回運営委員会(慶応高校物理教室)
- 予定
- 9/24 定例見学会
- 9/30 第6回運営委員会 会報76号発送(慶応高校物理教室)

## ☆☆地下壕見学会について☆☆

地下壕見学用入り口近くの斜面修復工事は9月2日に終了しました。9月24日から定例見学会を再開します。(毎月第4土曜を予定 変更もあります) 見学会について7,8月中も沢山のお問い合わせがあり、待って頂く状態でしたので10・11月の定例見学会も定員に達しそうです。夏休み中、中・高生の見学希望には案内できなくて残念でしたが、ビデオ・パンフレットなど資料を見てもらいました。地上を歩いて地域の方を訪ね、レポートを書いたという電話も頂きました。10月から「ふるサポ」の「ガイド養成講座」を始めます。皆様の参加をお待ちしています。(見学のお問い合わせは窓口までTEL・FAX045-562-0443)

▲定例見学会は毎月第4土曜日に行っています。なお日程が変わる場合もありますので必ず見学窓口に申し込んでください。(見学申込先 TEL & FAX 045-562-0443 喜田)

連絡先(会計) 亀岡敦子: 港北区白幡向町 20-49 045-402-9090

(見学会・その他) 喜田美登里: 港北区下田町 2-1-33 045-562-0443

ホームページ・アドレス: <http://www.geocities.HeartLand-Hanamizuki/2402>

日吉台地下壕保存の会会報

(年会費) 一口千円以上

発行 日吉台地下壕保存の会 郵便振込口座番号 00250-2-74921

代表 大西章 (加入者名) 日吉台地下壕保存の会

日吉台地下壕保存の会運営委員会